

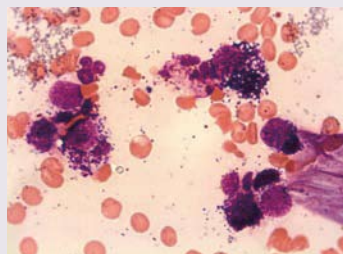
レトリバー種に 発症するガン

平野先生に、レトリバーたちのガンによる死亡について過去10年にわたってのデータを見せてもらったところ、ゴールデン（G）、ラブラドル（L）、フラット（F）と、多少特徴があることがわかります。以下はレトリバーの死亡原因となったガンの種類です。

多発性骨髄腫	G、G
血管肉腫	L、G、L、G、F、F
悪性骨肉腫	G、L、G、F、L
悪性リンパ腫	L、F、G、G、F、L
悪性組織球症	F、F、F、F
組織球肉腫	F
肝細胞癌	F、F、F
乳腺癌	F、F
肥満細胞腫	L、L、L、F、G
繊維肉腫	G
悪性上皮腫	F

「ゴールデンやラブに比較的多く見られるのは肥満細胞腫や骨肉腫などです。できるだけ7歳から検査を受けるようにしたほうがいいですね。フラットに関してはなぜか発症や進行が早く、3歳でリンパ腫を発症した子もいます。できるだけフラットの場合は4歳から必ず全身精査をしたほうがいいと思います。まずは細胞診から腫瘍細胞を確認し、病期（ステージ）を決めます。セオリーに基づいてデ

ータをとり病態を把握し、調査研究に基づいた適切な治療法を探していきます。場合によっては治療法をご家族が選ぶこともあります」。



細胞診では腫瘍であることが判明。



フラットでの皮膚に現れた異常。まだ小さいもの。全身をなでてあげることで気が付く。

早期発見はできる？

ガンには早期発見・早期治療が大切ですが、一年に一度がいいのか、半年に一度がいいのでしょうか？そこには代謝率の違いがあります。

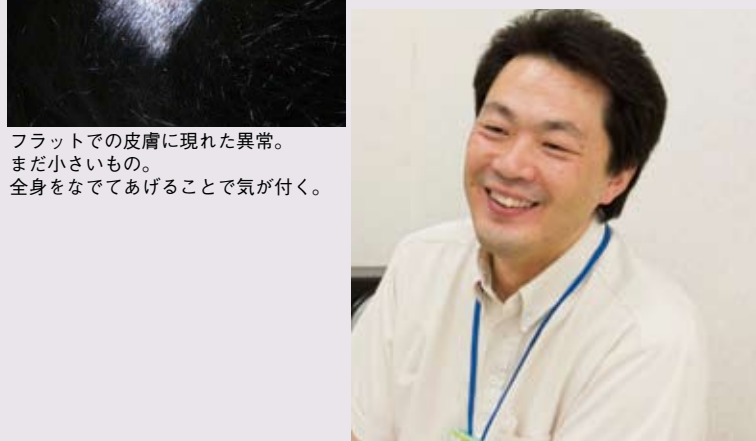
「人の場合は半年に一度の定期検査がありますが、イヌの場合は人とは代謝が違うので、検査による早期発見のタイミングを得ることは極めて困難なんです。1カ月に1回がベストですが、1カ月前は半年に相当してしまいます。イヌには基準値がほとんどないので、その子自身のデ

死亡原因の トップにあげられる“ガン” 獣医師が向かう新たな方向性、 “統合医療”のススメ

レトリバーの死因のトップにあげられるのが“ガン”。人もイヌも高齢化社会のなか、どうしてもガンの発生確率は高くなり避けられない現実となっています。では、ガンに対してどのように立ち向かっていったらいいのか、飼い主として心の準備をしておく必要があります。また現在はガンに対して多くの獣医師が感心を高く持ち、勉強を重ねています。平野先生も日本獣医がん学会に所属し、免疫療法も体得している腫瘍を専門としている一次診療の獣医師です。平野先生は最先端のガン治療を取り入れるなか、ホリスティック（全体療法）なケアにも関心が高く、西洋医学に基づいたうえでのホリスティックの導入を積極的に取り入れていくことを提案しています。

ひらの動物病院院長

平野 由夫 先生



ひらの動物病院
神奈川県大和市中央林間 2-3-11
電話 046-272-5300 <http://www.hirano-vets.com>
休診日 火曜・金曜
★2011年8月からクリスタルヒーリングを取り入れたヒーリングルームを新設予定

レトリバーに多い疾患 骨関節疾患とガンの 専門医



ガンに対してエビデンスに基づきいわゆる3大療法以外に、サプリメントやアロマ、さまざまなマッサージ、レイキヒーリング、クリスタルヒーリング、バッチフラワーなどのホリスティックケアを取り入れてみるのもお勧めです。「ガンの治療に関しては、科学的な治療が優先されますが、それに平行してホリスティックケアも積極的に取り入れることが、生活の質を上げていく要因になると思います。ガンは患者自身の細

ナチュラルケアのススメ

戻す。個々に適したオーダーメイドの治療法。「ガンの3大療法に関しては、いざれも腫瘍の完治・減容（小さくすること）を目指します。そしてエビデンスつまり学問的根拠・統計学的根拠に基づいた医療となります。免疫療法は免疫細胞療法ともいって、患者自身の細胞によるものなので、ガン細胞の増殖に負けない身体作りをしていくことが大切になります。生活の質の強化と維持を目指すものです。そのためには、サプリメントやアロマやマッサージなどのナチュラルケアを取り入れていくことが望ましいと思います」

胞でもあるわけで、自身の免疫力と体力をあげることが大切です。ストレスに強い体を作るためにも日常での規則正しい生活や朝陽を浴びて散歩することも大切。最先端の獣医学（二次診療）だけでは満足できるものではないからです。最近ではアニマルコミュニケーション（P130を参照）も飼い主さんから聞くことがあります。飼い主さん自身の心のケアも大切です。ガンに向かうには家族で向かうことが望まれます」

どんな治療がある？

ガンの治療には、大きく「根治治療」と「緩和治療」にわけられます。「根治治療」とは、早期に発見され、治癒可能な病期や病勢のものに対してガンの消失を狙って実施するもの。これに対して「緩和治療」とは、病期が進んでいるものや転移のあるもの、再発例など、治癒は望めないがガンを縮小させるなどして生活の質の向上を図るものです。そのために、ω大療法である「外科療法」「化学療法」「放射線療法」が併用もしくは単独で実施されます。第1療法として「免疫療法」があります。

外科療法：手術によりガンを取り除くことであり、治療対象となるのは、ガンが体の一部にみられる、除去できる大きさである、除去しても周囲の組織への影響が少ない、などの条件が求められる。

化学療法：抗ガン剤などの薬剤によりガンの増殖を抑え、腫瘍の消失、縮小を目的としている。

放射線療法：近年動物にも応用されるようになり、放射線をガン（腫瘍）に照射して、ガン細胞を死滅させるものである。

免疫療法：簡単にいうと細胞を活性化させること。その患者であるイヌの血液を採取しリンパ球を活性化させて患者に